

第 4 問

【解答】

問 1

	仕		訳	
	借方科目	金額	貸方科目	金額
(1)	材 料	1,612,000	買 掛 金	1,612,000
(2)	仕 掛 品	1,620,000	材 料	1,620,000
(3)	消費価格差異	75,000	材 料	75,000

問 2

完成品原価 = 1,872,000 円

問 3

製造間接費			
実 際 発 生 額	1,382,200	予 定 配 賦 額	(1,312,000)
		予 算 差 異	(22,200)
		操 業 度 差 異	(48,000)
	1,382,200		(1,382,200)

【解説】

問 1

- (1) 当月の直接材料実際購入高の計算：1,300 kg × 1,240 円/kg = 1,612,000 円
- (2) 当月の直接材料費：1,620,000 円（原価計算表の直接材料費の合計額。補修指図書分も含める。）
- (3) 消費価格差異は、予定消費単価で計算した直接材料費（(2)の金額）と実際消費単価で計算した直接材料費との差額で計算する。

先入先出法により実際消費単価で計算した直接材料費：

$$350 \text{ kg} \times 1,300 \text{ 円/kg} + 1,000 \text{ kg} \times 1,240 \text{ 円/kg} = 1,695,000 \text{ 円}$$

$$1) \quad 1,300 \text{ kg (当月購入量)} - 300 \text{ kg (月末在庫量)}$$

$$\text{消費価格差異} : 1,620,000 \text{ 円} - 1,695,000 \text{ 円} = -75,000 \text{ 円 (借方差異)}$$

日商簿記ゼミ 2 級工業簿記教本 pp.35-47 参照

問 2

完成品原価となるのは、当月に完成した製造指図書#0201 とその補修のために発行された補修指図書#0201-1 の合計金額である。

完成品原価：660,000 円+340,000 円+544,000 円+120,000 円+80,000 円+128,000 円=1,872,000 円

日商簿記ゼミ 2 級工業簿記教本 pp.93-94 参照

問 3

製造間接費配賦差異は、予定配賦額（1,312,000 円：原価計算表の製造間接費の合計額）と実際発生額（1,382,200 円：製造間接費勘定の借方の金額）の差額（70,200 円）として計算される。

さらに、これを次のように、予算差異と操業度差異に分析することができる。

予算差異：実際操業度における予算額－実際発生額

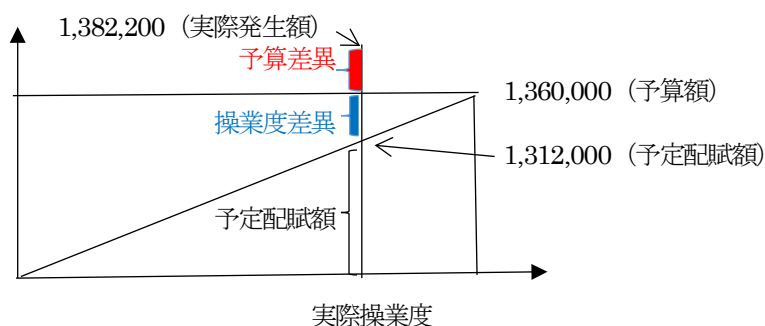
$$1,360,000 \text{ 円} - 1,382,200 \text{ 円} = -22,200 \text{ 円 (借方差異)}$$

操業度差異：予定配賦額－実際操業度における予算額

$$1,312,000 \text{ 円} - 1,360,000 \text{ 円} = -48,000 \text{ 円 (借方差異)}$$

合計が 70,200 円と一致することを確認！

固定予算の差異分析を図に表すと次のとおりである。



日商簿記ゼミ 2 級工業簿記教本 pp.82-89 参照

第 5 問

問 1

総合原価計算表

(単位：円)

	A 原料費	B 原料費	加工費	合計
月初仕掛品原価	480,000	0	220,000	700,000
当月製造費用	7,080,000	660,000	9,600,000	17,340,000
合計	7,560,000	660,000	9,820,000	18,040,000
差引：月末仕掛品原価	(240,000)	(0)	(160,000)	(400,000)
完成品総合原価	(7,320,000)	(660,000)	(9,660,000)	(17,640,000)

問 2

完成品総合原価＝ 17,520,000 円

【解説】

問 1

①月末仕掛品原価の計算

生産データを A 原料費と加工費に分けて整理すると、以下のとおりである。

なお、B 原料は月末仕掛品の進捗度 (50%) より後の 60% の点で投入されていることから、B 原料の当月製造費用は全額完成品原価となる。

A 原料費				加工費			
月初	4,000	完成	60,000	月初	2,000 ¹⁾	完成	60,000
当月	59,000	仕損	1,000	当月	60,000 (差引)	仕損	1,000 ²⁾
		月末	2,000			月末	1,000 ³⁾

1) 4,000 kg × 50%

2) 1,000 kg × 1.0

3) 2,000 kg × 50%

原価投入額の配分方法は先入先出法であるから、月末仕掛品原価は当月製造費用の金額のみから計算する。また、正常仕損の発生点が終点であるため、正常仕損費は完成品のみを負担となる。この場合、月末仕掛品原価の計算において、当月投入数量から仕損数量を差し引かない。

$$A \text{ 原料の月末仕掛品原価} : \frac{7,080,000 \text{ 円}}{59,000\text{kg}} \times 2,000\text{kg} = 240,000 \text{ 円}$$

$$B \text{ 原料の月末仕掛品原価} : 0 \text{ 円}$$

$$\text{加工費の月末仕掛品原価} : \frac{9,600,000 \text{ 円}}{60,000\text{kg}} \times 1,000\text{kg} = 160,000 \text{ 円}$$

②完成品総合原価の計算

$$\text{完成品総合原価} = (\text{月初仕掛品原価} + \text{当月製造費用}) - \text{月末仕掛品原価}$$

$$A \text{ 原料の完成品総合原価} : 7,560,000 \text{ 円} - 240,000 \text{ 円} = 7,320,000 \text{ 円}$$

$$B \text{ 原料の完成品総合原価} : 660,000 \text{ 円} - 0 \text{ 円} = 660,000 \text{ 円}$$

$$\text{加工費の完成品総合原価} : 9,820,000 \text{ 円} - 160,000 \text{ 円} = \underline{9,660,000 \text{ 円}}$$

$$\text{完成品総合原価} \quad \underline{\underline{17,640,000 \text{ 円}}}$$

日商簿記ゼミ 2 級工業簿記教本 pp.152-168 参照

問 2

正常仕損費をすべて完成品に負担させる場合、仕損品の処分価額は完成品総合原価と月末仕掛品原価を計算したあとで、完成品総合原価から差し引く。これにより、完成品総合原価は、次のように計算する。

$$\text{完成品総合原価} : 17,640,000 \text{ 円 (問 1 より)} - \frac{(1,000 \text{ kg} \times 120 \text{ 円/kg})}{\text{仕損品の処分価額}} = 17,520,000 \text{ 円}$$

日商簿記ゼミ 2 級工業簿記教本 pp.169-173 参照